

P3-2

平成 30 年福井豪雪における災害対策本部の活動報告

福井赤十字病院 災害対策支援室¹⁾、日本赤十字社福井県支部²⁾

○しらつか ひでゆき白塚 秀之¹⁾、田邊 毅¹⁾、山田 智也²⁾、小松 和人¹⁾、
高野誠一郎¹⁾

平成30年2月5日より福井県は37年ぶりの記録的な大雪に見舞われ、福井市では6日正午時点での積雪量が130cmを超えた。国道8号線では車約1,000台が立ち往生し、福井県は自衛隊に対し災害派遣要請を行った。A病院では、6日朝より情報収集を開始し、同日13:30に災害対策本部を設置した。災害対策本部の主な活動内容としては1) 駐車場・除雪関連: 病院周辺道路及び患者・職員駐車場の除雪作業遅延により、職員及び患者の登来院に支障を来したため、県への周辺道路除雪要請を行うとともに、空いている駐車場の再配分を行った。2) 帰宅困難者の把握と宿泊場所の確保: 帰宅困難職員のため院内に臨時宿泊施設を準備した。3) 通院困難な透析患者に対して、病床病棟を活用し入院対応を行った。4) 業務縮小: 登院困難職員の増加、大雪による入院患者の増加を予測して、定期手術延期等、業務縮小を検討・実施した。5) 国道8号線における車両立ち往生に伴い、体調不良者が続出することを予測して、救護班出動態勢を構築した。6) 収束後のアンケートの実施 などが挙げられる。今回の活動を振り返り、アンケート結果等も踏まえた今後の対策を検討したので報告する。

P3-4

救護員としての赤十字看護師研修とフォローアップ研修の併催の試み

京都第二赤十字病院 A 4 病棟¹⁾、京都第二赤十字病院 初療室²⁾、
京都第二赤十字病院 ICU³⁾、京都第二赤十字病院 看護部⁴⁾

○はやし ひろのり林 裕典¹⁾、甲斐沼靖大²⁾、村上 佳奈¹⁾、廣森 智幸³⁾、
吉田真由美⁴⁾、石野嘉佳子⁴⁾

【はじめに】災害看護の実践能力向上のために「救護員としての赤十字看護師研修」をより実践的な内容として行った。今回「救護員を目指す人」(以下「A群」)と「現救護要員」(以下「B群」)双方に対して共通のテーマで併催し、合同研修として実施した。その結果一定の成果が得られたので報告する。【方法】当院の過去の災害派遣に伴う活動内容は、避難所での活動が大半であった。過去の活動を踏まえて、「避難者や避難所での対応、起こりうる問題について考える事」をテーマに、「A群」は避難所運営ゲーム、「B群」は避難所アセスメントを行った。それぞれに研修を進めていき、避難所運営を担当する「A群」の所に救護班として派遣されたとの想定で「B群」が避難所へ向かって実際にアセスメントを行い、合同討議を行う場も設けた。【結果】研修全体の様子や合同討議、事後のアンケートより、「A群」と「B群」双方の立場から避難者や避難所に対する理解は深まっていた。一方で、「A群」と「B群」が接触する時間内に、それぞれが持っている情報から避難所の現状や問題点を共有し、対応を協議する機会をもつことができなかったという反省もあった。【考察】改善点はあるものの、実際の災害時の避難所の状況や救護班としての活動をよりリアルに体験し実感できたことがわかった。限られた時間内に断片的な情報から全体を把握し、対応を協議する困難さについては、研修内容の補足・修正とファシリテーションを工夫することで改善できると考える。これらによりグループダイナミクスによる効果をさらに発揮し、より発展性のある研修につながる事が期待できる。

P3-6

保健師を対象とした災害医療研修から見てきた課題

石巻赤十字病院 災害医療研修センター

○よしだ吉田 るみ、佐藤 克廣、魚住 拓也、高橋 邦治、亀山 勝、
市川 宏文

石巻赤十字病院では、平成26年より地域の保健師を対象に災害医療研修を実施してきた。平成26年は、石巻市の保健師を対象に避難所運営の研修を実施。平成27年は、二次医療圏の保健師全員を参加対象とし、同研修を実施した。平成28年は、二次医療圏の保健福祉事務所が主催者となり、保健師から要望のあったトリアージ研修を実施。保健師が全員参加できるよう、同じ研修を年間に3回実施した。研修参加者は、経験年数も様々でトリアージの方法を初めて学んだと言う保健師もいる中、保健師の経験年数や知識に合わせた研修が必要だという意見も聞かれた。これらの事から、研修担当の保健師と研修についての会議を開催。平成29年には、避難所のアセスメントについて研修を実施した。平成30年も研修を実施する事で、現在担当の保健師と調整を行っている。研修を重ねて来た中で、主催者が保健所に代わり、市町の保健師の中から研修担当が選出された。会議では、必要とする研修について納得できるまで話し合い、方法について合意する事ができた。しかし、研修に必要な予算が獲得できていないという課題が浮き彫りとなった。平時から保健師と災害対応について話し合い研修を行う事は、災害時に看護師(救護班)が果たす役割を模索させ、被災地住民の健康回復のための救護活動と、保健師と顔の見える関係作りにも大変有意義である。平成30年は、二次医療圏以外の保健師からも研修開催の要望が寄せられ、当該医療圏の災害拠点病院と連携しての研修開催を予定している。研修時に使用する材料や人の移動に伴う費用についての課題からも、災害発生時の対応能力の維持・向上にむけての予算獲得や人材育成の為の研修実施についてのシステムを構築していく必要があると考える。

P3-3

平成 30 年福井豪雪における看護部の活動報告

福井赤十字病院 看護部

○いのうえ かずこ井上 和子、内田 智美

平成30年2月5日より福井県は37年ぶりの記録的な大雪に見舞われ、福井市では6日正午時点での積雪量が130cmを超えた。A病院看護部では、6日朝から看護職員の登院状況や帰宅困難職員等の情報収集を開始し、同日13:30に設置された災害対策本部と情報共有を行いながら対応を検討した。2月16日17:00に災害対策本部が解散するまでの看護部の主な活動内容は以下の通りである。1) 帰宅困難職員と出動状況の把握: 連日状況調査を行い、通常診療業務が維持できるように人員を調整した。2) 病床管理: 帰宅困難患者の増加・地域連携施設受け入れ困難に伴うベッド稼働率の向上に加え、大雪による転倒等に伴う緊急入院の増加が予測されたため、検査・手術延期可能な予定入院の受け入れ中止などを行った。3) 透析通院困難患者対応: 休床中の病棟に20床の入院用ベッドを確保、透析室看護師を配置し入院受け入れを行った。4) 待機救護班の確保: 幹線道路における車両の立ち往生に伴い、体調不良者の増加が予測されたため、県支部などと協働して待機救護班の確保を行った。今回10日以上に及ぶ災害対応を経験し見えてきた問題点も含め報告する。

P3-5

災害派遣経験者による救護員としての赤十字看護師研修開催の試み

京都第二赤十字病院 A4病棟¹⁾、京都第二赤十字病院 ICU²⁾、
京都第二赤十字病院 初療室³⁾、京都第二赤十字病院 看護部⁴⁾

○むらかみ かな村上 佳奈¹⁾、廣森 智幸²⁾、林 裕典¹⁾、甲斐沼靖大³⁾、
吉田真由美⁴⁾、石野嘉佳子⁴⁾

【はじめに】 当院が行った救護活動の内容を振り返ると、避難所アセスメントや避難所内救護所活動が主であった。しかし、これまでの研修内容だけでは活動内容がイメージしにくい現状があった。そこで、災害派遣経験者が、救護員活動を具体的にイメージができることを目的とした研修を開催したのでここに報告する。【方法】リアリティを高めるために、経験を基に体験型の研修を主に行った。具体的には実際の資機材を使用、模擬被災者を想定し、動線などを考えられるように設定した。避難所アセスメントではシートを用いて記入・アセスメントを行い、避難所内救護所活動では情報収集から設営・運営までの研修を実施した。【結果】 限られた情報や資器材の中で研修を受けることに戸惑いが見られたが、開催後のアンケート結果では、「活動する上で何を考えられなければならないかイメージがついた」「メンバーの役割認識と連携が重要であると感じた」「主事の役割が分らない」といった意見等があった。【考察】 災害派遣経験者が経験を踏まえた上で分かり易くより実践的な研修を行っていくことは災害救護活動のイメージ化に繋がったと考え、目的は達成できた。一方で、他職種との協働部分について分りにくいという課題が露呈された。今後は他職種との連携という点についても研修に取り入れることでより効果的な研修に繋がると考える。【結論】 災害派遣経験者が研修を企画することは未経験者にとってより実践的な研修となる。今後も体験型の研修を取り入れ、イメージ化しやすく、より実践的な研修を継続していき、災害派遣があった場合は検証する必要がある。

P3-7

災害時における医療用酸素供給体制を準備する(第二報)

長野赤十字病院 救急外来¹⁾、健康管理科²⁾

○みなむら あさこ峯村 朝子¹⁾、星 研一²⁾

発災時の医療機関で赤エリア重症患者への酸素投与は、救援医療が入るまでの間にも不可欠な医療行為である。すなわち酸素は建物被害が生じるような地震等の大災害時に医療能力を維持するBCP (Business Continuity Plan) の重要なライフライン医療資源の一つである。熊本地震では病院建物で一部停電し、救急外来機能が移動せざるを得ない事例が発生した。そのような状況を踏まえて当院での医療資源について見直してみた。万が一、院外に設置されている定置式液化酸素貯槽 (CE) からの酸素配管が遮断された際、入院中患者及び災害時に来院される受傷者への酸素供給体制の整備と運用マニュアルを作成し、昨年本学会において報告した。今年度は【目的】発災時、マニュアルにもとづく運用について、スタッフ内での訓練やマニュアルを見ながら初めて行う病院職員の院内災害訓練時での実施経験を通じて、より実用的な体制を整備する。【結果】 1. 災害時酸素供給アクションカードを作成した。増設したマニホールド室内大型ボンベ (7000L) を使用しての運送による酸素分配法 (火災時に可燃物となる酸素の供給を遮断するために各フロアに設置されているシャットオフバルブを閉じることで生じる回路を酸素分配装置と考えて、ここに持ち込んだ非常用ボンベから配管を連結し酸素を運送して1本のボンベから多人数に酸素を供給する) の運用は初回は難しいことがわかった。 2. 大型ボンベ (7000L) は重量60kgのため、保管倉庫からの運搬には人数や搬送器具が必要であることがわかった。このため安価な搬送用器具につき開発中である。【課題】 災害に強い赤十字病院になるためには、酸素供給体制をはじめ、様々な状況に応じて、対策を立て、訓練を通じて問題点を明らかにし、職員全体でのレベル向上を図る必要がある。